SPARC Japan
SPARC : Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition

ISSN 2188-8248

国際学術情報流通基盤整備事業
（SPARC Japan）
年報

平成27（2015）年度

国立情報学研究所

目次

巻頭言 1
１　概要 2
１．１　第４期の活動概要 2
１．１．１　第４期の基本方針 2
１．１．２　第４期事業計画 2
１．２　平成２７年度活動 3
１．２．１　SPARC Japan セミナー 3
１．２．２　海外動向調査 3
１．２．３　SCOAP³ 支援 3
１．２．４　arXiv.org 支援 4
１．２．５　ORCID Outreach Meeting 支援 4
１．２．６　論文公表実態調査 4
１．２．７　平成 26 年度 SPARC Japan 年報の発行 4
２　委員会等開催記録 5
２．１　国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会 5
３　委員名簿 5
３．１　国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会 5
３．２　SPARC Japan セミナーワーキンググループ 6
４　SPARC Japan セミナーの記録 7
５　総合年表 8
６　刊行物一覧 18
６．１　国際学術情報流通基盤整備事業(SPARC Japan)年報 18
６．２　SPARC Japan　ニュースレター 18
６．３　SPARC Japan セミナー資料 18
７　資料　ニュースレター再掲 21

巻頭言

平成 15 年から始まった本事業にとって、平成 27 年度は第 4 期最後の年になります。この一年の活動を年報としてまとめました。SPARC Japan セミナーの内容をまとめたニュースレターもすべて再録しております。

第 4 期はオープンアクセス（OA）の推進に資する活動に重点を置いてきました。第 4 期中、通算 13 回開催してきた SPARC Japan セミナーでは、オープンアクセスアドボカシーを中心としたセミナーを開催してきました。図書館関係者、出版関係者の関心を引き、関係者に裨益する活動は一定程度の成果のある情報提供、意見交換の場を提供できましたし、特に海外からの招聘を含んだいくつかの企画において、オープンアクセスの商業化、財政支援の考え方など、日本での展開を認識することが可能となるなど、予想を越えた成果を上げております。

国際イニシアティブに対して、日本としてのオープンアクセス財政支援を行う SCOAP[3] や arXiv といった活動は、わが国のオープンアクセス活動のパイロット事例として有意義でありますし、更に国立情報学研究所が中心となって国内のとりまとめ、海外との窓口を担当していることは特筆すべきことでしょう。ORCID についてはその Outreach Meeting を平成 26 年度に国立情報学研究所で開催いたしましたし、COAR の年次会議にはほぼ毎年関係者を派遣しております。国内的には、「大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議」及びその傘下の諸委員会と連携しつつ、活動を行ってきております。

また、第 3 期までの学協会等と緊密に連携していた活動について、その活動が当初目的をほぼ達成しましたが、各学協会が自分自身のリーダシップの下で学術情報発信を行っていくという点において、今後も、息長く、学術誌の連携を司る役目は継続することが期待されていると受け止めております。

第 4 期ではオープンアクセスに係る基礎的情報の把握という主旨で、SCOAP[3] 対象誌に係る調査と『オープンアクセスジャーナルによる論文公表に関する調査』（平成 26 年 5 月）を行いました。今後もこのような調査を適宜行う予定です。

最後になりますが、SPARC Japan の活動に関わっていただいた全ての方に感謝いたしますと共に、今後の皆様の厚いご支援をお願い申し上げます。

平成 28 年 4 月 1 日

国際学術情報流通基盤整備事業委員長

安達　淳

１ 概要

１．１ 第４期の活動概要

１．１．１　第４期の基本方針

「国際連携の下でのオープンアクセスの推進、学術情報流通の促進および情報発信力の強化」に取り組むことを基本方針とする。第 4 期は、大学図書館と研究者の連携を促進するとともに、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のとるべき対応について検討し、これに関するプロジェクトを推進する。

１．１．２　第４期事業計画

SPARC Japan　第 4 期の事業は次の 3 つを柱として計画することが、平成 24 年度第 2 回国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会で決定した。

(1)国際的な OA イニシアティブとの協調

第 3 期に引き続き、SPARC、SPARC Europe との連携を強化するとともに、個別プロジェクトにおいても SCOAP[3]、arXiv.org、ORCID、COAR 等の国際イニシアティブと協調しつつ国際学術情報流通基盤整備を進める。

(2)オープンアクセスの課題への対応と体制整備

大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議と協力しつつ、国際学術情報流通基盤整備を推進する。

世界的に変化の著しいビジネス環境の中で、学術情報流通の変化に学術コミュニティが適切に対応するために、大学図書館・研究者および国立情報学研究所が連携して、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のとるべき対応について検討する。オープンアクセス誌への対応や機関リポジトリの今後を検討する。

オープンアクセスの課題について検討するために、アドボカシー活動を継続する。国内外の動向の情報収集活動を継続し、SPARC Japan セミナー等で国内に還元する。この活動には、大学図書館、研究者、学会等のコミュニティが主体的に参加できるための場を提供するとともに、速報性を高めた広報も行う。

(3)オープンアクセスに関する基礎的情報の把握

学協会誌に関する定量的・基礎的情報の把握・評価のため、第 3 期まで実施してきた「日本の学術情報発信状況の調査」を引き続き、継続する。

オープンアクセス誌および機関リポジトリの利用実態や投稿実態について、動向調査を行い、基礎的情報の把握に努める。

１．２ 平成２７年度活動

１．１の事業計画のもと、平成 27 年度は次のプロジェクトを実施した。

１．２．１　SPARC Japan セミナー

アドボカシー活動として、SPARC Japan セミナーを 4 回実施した。セミナーワーキンググループ（以下、「WG」という。）を立ち上げ、WG メンバー全員で年度を通した全体テーマ、セミナー各回のテーマの割り振りを検討し、各回に担当者を置いて企画・実施した。セミナー終了後、WG メンバーの担当者が速報性を重視してセミナーに関する記事を書き、SPARC Japan ニュースレターを発行・ウェブ配信した。

第 26 号（2015 年 11 月）: 学術情報のあり方 - 人社系の研究評価を中心に -

第 27 号（2015 年 11 月）: 科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて
- e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -

第 28 号（2016 年 2 月）: 研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性

第 29 号（2016 年 3 月）: 研究振興の文脈における大学図書館の機能

１．２．２　海外動向調査

下記の国際会議に参加し、情報収集を行った。

・COAR(Confederation of Open Access Repository) 2015 Annual meeting
（4 月 15-16 日 Porto, Portugal）に大学図書館員 2 名を派遣した。

・OR2015 (The 10th Annual International Conference on Open Repositories)
（6 月 8-11 日 Indianapolis, USA）に大学図書館員 2 名を派遣した。

・SPARC Meeting on Openness in Research & Education
（3 月 7-8 日 San Antonio, USA）に NII 古川特任助教を派遣した。

１．２．３　SCOAP^3 支援

2014 年から開始した SCOAP^3 について 2015 年も参加意向および連絡先を確認し、日本の大学図書館からの拠出金を、日本のナショナル・コンタクト・ポイントである NII がとりまとめて支払った。なお、日本からは 2016 年 3 月末現在 34 機関が参加している。

SCOAP^3 により OA(Open Access)化される論文数は着実に増えている。拠出額を算定する根拠とした 2011 年には当該 10 誌で 3,552 論文出版されたが、2014 年中に 4,280 論文が、2015 年には 4,477 論文が発行された。2014-15 年の平均 APC(Article Processing Charge)は 1,100Euro であり、これは Gold OA 誌の APC の水準から見ても低くなっている。

SCOAP^3 の OA 論文を収載した SCOAP^3 リポジトリとその API が既に公開されているが、リポジトリは DOI 付与、CC BY ライセンス表示、XML 形式で公開されており、テキストマイニング、データマイニングが可能である。なお、2016 年 3 月には OA 論文が 1 万件に達したことが報じられた。

１．２．４　arXiv.org 支援

arXiv.org は物理学のプレプリントサーバで、コーネル大学図書館が運用している。2014 年 12 月に 100 万論文を突破し、新規登録数は年間 9 万件、ダウンロード数は年間約 8,100 万件である。利用件数上位の機関による財政支援があり、2013～2017 年の「arXiv 会員制プログラム」には 24 カ国 183 機関が参加している。

日本においては NII が各大学の意思確認を取りまとめて支援してきた。利用回数順位 300 位までの大学に会員申請の意向調査を行った結果、2016 年 3 月末現在の会員数は 13 機関である。

2014 年 4 月にコーネル大学から、日本の会員館でコンソーシアムとして参加することについて打診があり、会員に確認の後、コンソーシアム契約に切り替えを行った。会費はコンソーシアム価格のため 10%減となった。

さらに 2015 年度には、本コンソーシアム名を日本研究図書館コンソーシアム（英文名：Consortium of Japanese Research Libraries: Coordinated by National Institute of Science (NII)、英文略称： NII Japan Consortia）とした。また、京都大学引原隆士図書館機構長が本コンソーシアムの代表に就任し、2016 年から arXiv.org の Member Advisory Board（MAB）に参加することとなった。

１．２．５　ORCID Outreach Meeting 支援

ORCID Outreach Meeting は ORCID の活動の広報、ORCID に関係する機関や関係者、および著者 ID や学術に関する情報流通に関する議論や報告が行われる会合である。2015 年 5 月に NII 蔵川特任准教授が、2015 年 11 月及び 2016 年 2 月には NII 武田英明教授が出席し、著者識別子の普及活動にあたった。

１．２．６　論文公表実態調査

大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）と連携し、JUSTICE の下に論文公表実態調査チームを設け、我が国における論文公表と APC(Article Processing Charge)の実態調査を開始した。

１．２．７　平成 26 年度 SPARC Japan 年報の発行

平成 26 年度の活動状況をまとめ、平成 27 年 9 月に発行した。

２ 委員会等開催記録

２．１ 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

開催日	議題
第１回 平成 27 年 8 月 4 日	1. 前回議事要旨（案）について 2. 平成 27 年度 SPARC Japan セミナーの活動計画について【審議】 3. HORIZON2020 によるオープンアクセス政策とオープンサイエンスの国際的課題に関するシンポジウムの後援について【審議】 4. 国内研究者による論文公表に関する調査について【審議】 5. SPARC Japan 第 4 期のまとめについて【審議】 6. SPARC Japan 第 5 期基本方針について【審議】 7. その他
第２回 平成 27 年 11 月 30 日	1. 前回議事要旨（案）について 2. SPARC Japan 第 5 期（平成 28～30 年度）基本方針（案）について【審議】 3. 平成 28 年度活動計画について【審議】 4. 米国 SPARC との MoU 更新について【報告】 5. 論文公表実態調査チームの活動状況について【報告】 6. その他
第３回 平成 28 年 3 月 24 日	1. 前回議事要旨（案）について 2. 平成 27 年度 SPARC Japan 事業報告 3. 論文公表実態調査チームの活動状況について【報告】 4. SCOAP^3 フェーズ 2 の状況について 5. SPARC Japan 第 5 期（平成 28～30 年度）基本方針（案）について【審議】 6. 平成 28 年度活動計画について【審議】 7. 平成 28 年度 SPARC Japan セミナー企画ワーキング・グループの設置について【審議】 8. その他

３ 委員名簿

３．１ 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

氏名	所属・役職	備考
逸村　裕	筑波大学　図書館情報メディア系教授	１号委員 （研究教育職員）
今井　浩	東京大学大学院　情報理工学系研究科教授	１号委員 （研究教育職員）
森　重文	京都大学数理解析研究所　教授	１号委員 （研究教育職員）
土屋　俊	独立行政法人　大学評価・学位授与機構 教授	１号委員 （研究教育職員）
倉田　敬子	慶應義塾大学　文学部教授	１号委員 （研究教育職員）
小林　富雄	高エネルギー加速器研究機構 教授 国際連携推進室 室長	１号委員 （研究教育職員）

深貝　保則	横浜国立大学大学院国際社会科学研究院 教授 附属図書館長	１号委員 （研究教育職員）
尾城　孝一	東京大学附属図書館 事務部長	２号委員 （大学図書館関係者）
荘司　雅之	早稲田大学図書館 事務部長兼総務課長（～2015.11） 事務部長（2015.12～）	２号委員 （大学図書館関係者）
林　和弘	科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター　上席研究官	３号委員 （学会の関係者）
安達　淳	国立情報学研究所　副所長	委員長
酒井　清彦	国立情報学研究所　学術基盤推進部次長	

３．２ SPARC Japan セミナーワーキンググループ

氏名	所属・役職
梶原　茂寿	北海道大学附属図書館学術システム課 システム管理担当係長
横井　慶子	東京大学附属図書館情報管理課資料管理係 一般職員
林　和弘	科学技術・学術政策研究所 上席研究官
三根　慎二	三重大学　人文学部文化学科 講師
駒井　章治	奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科　准教授
星子　奈美	九州大学附属図書館ｅリソースサービス室 リポジトリ係長
市古　みどり	慶應義塾大学日吉メディアセンター 事務長
蔵川　圭	国立情報学研究所　学術コンテンツ課 特任准教授

4 SPARC Japan セミナーの記録

平成 27 年度 SPARC Japan セミナー実施記録

回	実施日	テーマ	講師　（所属）	形態	参加人数
1	平成 27 年 9 月 30 日（水） 13:00～17:00 （NII 12 階会議室）	学術情報のあり方 - 人社系の研究評価を中心に -	○駒井　章治　（奈良先端科学技術大学院大学） ○中尾　央　（山口大学国際総合科学部） ○野村　康　（名古屋大学環境学研究科） ○永崎　研宣　（人文情報学研究所） ○中村　征樹　（大阪大学全学教育推進機構） ○佐藤　郁哉　（一橋大学商学研究科） ○竹内　比呂也　（千葉大学） ○〔司会〕横井　慶子（東京大学附属図書館）	オープン	95
2	平成 27 年 10 月 21 日（水） 10:15～17:45 （NII 12 階会議室）	科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて - e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -	○Mark Parsons　（Research Data Alliance） ○北本　朝展　（国立情報学研究所） ○池田　大輔　（九州大学システム情報科学研究院） ○能勢　正仁　（京都大学大学院理学研究科） ○加藤　斉史　（科学技術振興機構） ○田中　良昌　（国立極地研究所） ○大山　敬三　（国立情報学研究所） ○星子　奈美　（九州大学附属図書館） ○〔司会・モデレーター〕武田　英明（国立情報学研究所） ○〔司会・モデレーター〕蔵川　圭（国立情報学研究所）	オープン	100
3	平成 28 年 1 月 19 日（火） 13:00～17:00 （NII 12 階会議室）	研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性	○Jeroen Bosman　（Utrecht University Library） ○坂東 慶太　（Coordinator for the Online Platform for Scientific Communication） ○鳥海 不二夫　（東京大学大学院工学系研究科） ○垂井 淳　（電気通信大学大学院情報理工学研究科） ○林 和弘　（科学技術・学術政策研究所） ○三根 慎二　（三重大学人文学部） ○〔司会〕横井　慶子（東京大学附属図書館）	オープン	87
4	平成 28 年 3 月 9 日（水） 13:00～17:15 （ベルサール神保町アネックス ホール A）	研究振興の文脈における大学図書館の機能	○尾城 孝一（東京大学附属図書館） ○引原 隆士（京都大学） ○真子 博（内閣府） ○有川 節夫（九州大学） ○市古 みどり（慶應義塾大学日吉メディアセンター） ○〔司会〕星子 奈美（九州大学附属図書館）	オープン	161
合計					443
平均					111

5 総合年表

年度	評議会　運営委員会	主催イベント	その他のイベント
平成 15 （2003）	06/25　第 1 回評議会 07/14　事業参画提案の募集開始 08/01　第 1 回運営委員会 09/11　第 2 回運営委員会 09/17　第 2 回評議会（事業参画提案決定） 09/17　記者発表 10/08　作業グループ合同会議 03/22　第 3 回運営委員会 03/23　第 3 回評議会	07/02　学協会向け事業説明会（於：日本教育会館） 08/19　事業説明会（於：東北大学　東北大学附属図書館との共催） 01/21-29 Project Euclid 説明会（於：学術総合センター、東北大学、京都大学、名古屋大学） 02/23　SPARC/JAPAN 懇談会：参加学会への成果報告、新雑誌創刊構想説明（於：学術総合センター） 03/11　SPARC/JAPAN セミナー：生物系学協会誌をめぐる学術情報流通体制の将来　-UniBio Press のめざすもの-（於：東京大学附属図書館）	11/05　第 5 回図書館総合展フォーラム「SPARC／JAPAN：日本の国際学術コミュニケーションの変革」開催（於：東京国際フォーラム　国立大学図書館協議会・私立大学図書館協会主催） 11/20　国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース（生物系、物理系、医学系の購読交渉）
平成 16 （2004）	05/28　第 1 回運営委員会 06/02　第 1 回評議会 06/07　参画提案募集開始 09/15　第 2 回運営委員会	07/07　学協会向け事業説明会（於：学術総合センター）	07/01　国立大学図書館協会総会ワークショップ：「国際学術情報流通基盤整備事業の活動」（於：大阪大学コンベンションセンター）

	09/22　第 2 回評議会（事業参画提案選定） 10/14　作業グループ合同会議 03/07　第 3 回運営委員会 03/10　第 3 回評議会	09/27　Project Euclid 懇談会（Project Euclid への参画に関する技術的打ち合わせ、DPubS についての説明） 10/15　シンポジウム：学会出版と学術コミュニケーション活動の変革～SPARC/JAPAN を事例として～（於：広島大学中央図書館　広島大学図書館、国立情報学研究所、国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会共催） 10/19　緊急シンポジュウム「どうする日本の学術誌！」（於：早稲田大学総合学術情報センター　（社）高分子学会、（社）電子情報通信学会、東北数学雑誌編集委員会、（社）日本機械学会、（社）日本金属学会、（社）日本動物学会、（社）日本分析化学会、日本哺乳動物卵子学会、日本哺乳類学会、国立情報学研究所共催） 11/05　OUP 懇談会「Open Access の現状について」 11/25　第 6 回図書館総合展フォーラム「学術コミュニケーションの最先端：オープン・アクセスとセルフアーカイブ」（於：パシフィコ横浜） 01/27　ワークショップ「電子ジャーナルのビジネスモデル構築と学術出版をめぐる動向」（於：日本教育会館） 03/24　シンポジウム「SPARC の現状と課題：学術雑誌・機関レポジトリ・オープン・アクセス」（於：早稲田大学）	10/19-20 Project Euclid DPubS Conference に参加（於：コーネル大学）
平成 17 （2005）	06/06　第 1 回運営委員会 06/08　第 1 回評議会	05/19　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 1 回「Nature の歴史、今、未来を語る－Nature の編集方針」 06/29　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 2 回「電子投稿査読システムとは何か－今、日本で使えるシステム」JST「J-STAGE 投稿審査システム」 07/09-10 電子ジャーナル利用の現在と未来に関するクローズド・ワークショップ（於：経団連ゲストハウス、静岡） 07/15　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 3 回「オープン・アクセスの理念と実践－研究者・図書館・学術誌」	06/21-22 JISC International Solutions for the Dissemination of Research に出席、討議（ロンドン） 07/07-08 エルゼビア・ライブラリ・コネクト・セミナー2005「ユーザーを理解する（Understanding Users）」（於：京都・東京、エルゼビア・ジャパン主催、NII 後援）

	10/13　第 2 回運営委員会 10/26　第 2 回評議会（事業参画提案選定） 02/15　第 3 回運営委員会 02/24　第 3 回評議会	07/20　UniBio Press の挑戦 － 学会の新しいビジネスモデル（於：茨城大学　茨城大学図書館主催） 09/22　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 4 回「電子ジャーナルをどう作成し、どう公開するかー学協会、企業の試み」 10/06　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 5 回「主体である研究者は何をすべきかー電子ジャーナル時代を迎えて」（於：つくば国際会議場社団法人日本動物学会第 76 回大会関連シンポジウムとの共催） 11/24　SPARC/JAPAN 連続セミナー臨時回「Journal of Bioscience and Bioengineering WEB 投稿審査システム」説明会・デモンストレーション 11/30　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 6 回「第 7 回図書館総合展フォーラム COUNTER プロジェクト：オンライン利用統計の国際標準について」（於：パシフィコ横浜） 12/01　COUNTER プロジェクトに関するクローズド・ワークショップ 12/12　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 7 回「日本の学術誌における英文校閲を考える」 01/31　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 8 回「学術情報流通をめぐる最近の動向と技術標準：Google Scholar、 CrossRef、 OAI-PMH、 etc.」 02/10　SPARC/JAPAN 連続セミナー第 9 回「SPARC/JAPAN 選定誌によるラップアップセッション」	09/15　山口大学図書館セミナー2005「日本の電子ジャーナルの現況」学術コミュニケーションの今日：SPARC/JAPAN の挑戦（於：山口大学学術情報機構図書館主催） 09/16　京都大学学術情報・電子ジャーナルシンポジウム「「大学における学術情報資源の整備—電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革—」（於：京都大学　京都大学附属図書館と NII の共催） 12/09　長崎大学附属図書館連続講演会第二回講演会「学術情報発信の新しい動向」：SPARC/JAPAN の活動と課題（於：長崎大学附属図書館主催）
平成 18 （2006）		06/30　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 1 回「海外商業出版社から見た日本の学術コミュニティ」 07/26　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 2 回「e-Journal の販促とライセンシング：海外の状況と海外市場における日本ジャ	03　米国研究図書館協会（ARL）と MOU を締結 07/03-04 エルゼビア・ライブラリ・コネクト・セミナー2006「From “ Search ” to “ Find ” ～ 必要な情報を見つけやすい環境づくり ～」（於：東京・大阪、エルゼビア・ジャパン主

	09/08　第 1 回運営委員会 01/30　第 2 回運営委員会	ーナルの展望」 09/05　Sally Morris 氏講演会「Introducing ALPSP」 09/29　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 3 回「Web 投稿審査システムの検証：ビフォーアフター」 11/02　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 4 回「大学図書館から学術出版社への要望：COUNTER を例にして」 11/20　第 8 回図書館総合展フォーラム「TRANSFER－出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」（於：パシフィコ横浜） 12/14　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 5 回「著作権：学会の権利、著者の権利、機関リポジトリへの対応」 12/18-19 「デジタル巨人の肩の上に立つ」機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム（於：都市センターホール） 01/30　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 6 回「e-Journal の販売とライセンシング(2)- 販売のプロに学ぶ成功の秘訣」 03/05　SPARC Japan 連続セミナー2006 第 7 回「計量書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る」	催、NII 後援）
平成 19 （2007）	06/12　パートナー誌合同会議 07/19　第 1 回運営委員会	07/17　SPARC Japan 連続セミナー2007 第 1 回「計量書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る-2-」 10/02　SPARC Japan 連続セミナー2007 第 2 回「Web 投稿審査シス	05/15　UniBio Press セミナー「生物系ジャーナル の挑戦－より明確に、より広く、その情報を伝えるために」（於：学術総合センター　UniBio Press 主催） 05/17　UniBio Press セミナー「生物系ジャーナル の挑戦－より明確に、より広く、その情報を伝えるために」（於：京都大学附属図書館　UniBio Press 主催） 08/05-11 41th IUPAC　（International Union of Pure and Applied Chemistry）化学会議出展（トリノ） 08/20-22　234th ACS 秋季大会出展（ボストン）

	12/14　パートナー誌と大学図書館の合同会議「SPARC Japan パートナー誌のコンソーシア購入に向けて」 02/29　第 2 回運営委員会	テムの検証パート 3 稿より良いシステムを目指して—」 11/02　SPARC Japan 連続セミナー2007 第 3 回「メタデータ Publishing の現在—電子ジャーナル主体の製作・出版に必要なもの」 11/09　第 9 回図書館総合展プレゼンテーション「日本の英文トップ電子ジャーナルの挑戦—図書館総合展プレゼンテーパートナー誌からの提案—」（於：パシフィコ横浜） 01/17　SPARC Japan-ALPSP 特別セミナー（第 4 回 SPARC Japan 連続セミナー2007）「学術出版と学会 Journal Publishing and Scholarly Societies」 01/18　ALPSP トレーニングコース「Introduction to Journal Publishing」	11/07-09 第 9 回図書館総合展出展（於：パシフィコ横浜）
平成 20 （2008）		04/22　SPARC Japan セミナー2008 第 1 回「研究成果発表の手段としての学術誌の将来」 06/24　SPARC Japan セミナー2008 第 2 回「学術出版と XML 対応-日本の課題」 07/10　SPARC Japan セミナー2008 第 3 回「韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して -」 09/02-03 RIMS 研究集会（第 4 回 SPARC Japan セミナー2008）「紀要の電子化と周辺の話題」（於：京都大学数理解析研究所 京都大学数理解析研究所主催） 10/14　SPARC Japan セミナー2008 （Open Access Day 特別セミナー）「日本における最適なオープン・アクセスとは何か？」	06/15-17 SLA（Special Libraries Association 米国専門図書館協会）年次総会出展（シアトル） 06/26　第 55 回国立大学図書館協会総会出展（於：東北大学） 07/13-15 中国化学会学術年会出展（於：天津） 08/17-19 236th ACS National Meeting & Exposition 出展（於：フィラデルフィア） 09/11-12 私立大学図書館協会総会出展（於：國學院大學） 09/16-20 2nd EuCheMS Chemistry Congress 出展（於：トリノ） 09/25-26 KESLI（Korean Electronic Site License Initiative）電子情報 EXPO での発表、出展（於：大田） 10/12-15 15th North American ISSX (International Society for the Study of Xenobiotics)) Meeting での広報（於：サンディエゴ） 10/27-30 ISAP2008（International Symposium on Antennas and

	12/24　第 1 回運営委員会 03/10　第 2 回運営委員会 03/27　パートナー誌合同会議 03/27　第 3 回運営委員会	11/17-18 SPARC Digital Repositories Meeting 2008（於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、 SPARC Japan 共同主催） 11/25　SPARC Japan セミナー2008 第 6 回「IF を越えて-さらなる研究評価の在り方を考える」 11/27　SPARC Japan セミナー2008 第 7 回（第 10 回図書館総合展・学術情報オープンサミット 2008 フォーラム）「Open Access Update」 12/16　SPARC Japan セミナー2008 第 8 回「日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム」 01/22-26 Project Euclid と数学系ジャーナルの打ち合せ（於：国立情報学研究所、京都大学、東京工業大学） 02/13　SPARC Japan セミナー2008 第 9 回「SPARC Japan 選定誌がやってきたこと」	Propagation）出展（於：台湾） 11/13-14 INFOPRO2008 プロダクトレビュー参加・出展（於：日本科学未来館） 12/17-20 EUC2008（International Conference On Embedded and Ubiquitous Computing）出展（於：上海） 03/16-20 APS March Meeting 2009（米国物理学会年会）出展（於：ピッツバーグ）
平成 21 （2009）	10/05　第 1 回運営委員会	06/25　SPARC Japan セミナー2009 第 1 回「研究者は発信する－多様な情報手段を用い、社会への拡がりを求めて」 08/04　SPARC Japan セミナー2009 第 2 回「非営利出版のサステイナビリティとは－OUP に学ぶ」 09/08-09 RIMS 研究集会（第 3 回 SPARC Japan セミナー2009）「数学におけるデジタルライブラリー構築へ向けて－研究分野間の協調のもとに」 09/17　日本動物学会大会（第 4 回 SPARC Japan セミナー2009）「ZS プロジェクトについて」 10/20　Open Access Week　（第 5 回 SPARC Japan セミナー2009）「オープンアクセスのビジネスモデルと研究者の実際」 11/11　第 6 回 SPARC Japan セミナー2009　（第 11 回図書館総合展学術情報オープンサミット 2009 フォーラム）	11/25　第 9 回アジア太平洋生物化学工学会議（APBioChEC 2009）

	03/23　第 2 回運営委員会	「NIH Public Access Policy とは何か」 12/11　第 7 回 SPARC Japan セミナー2009「人文系学術誌の現状ー機関リポジトリ、著作権、電子ジャーナル」 02/02　第 8 回 SPARC Japan セミナー2009「Marketing to Libraries Worldwide」 02/03　ALPSP トレーニングコース「Effective Journals Marketing」	に SPARC Japan の化学系パートナー誌が出展 12/03-04 DRFIC 2009　デジタルリポジトリ連合国際会議 2009（於：東京工業大学　DRF（デジタルリポジトリ連合）と NII の共催）
平成 22（2010）		06/23　第 1 回 SPARC Japan セミナー2010「学会の仕事とその経営を知る」 07/06　第 2 回 SPARC Japan セミナー2010「ジャーナル出版—海外学会の現状」 08/24　第 3 回 SPARC Japan セミナー2010「図書館の仕事を知る -学術雑誌の購読と利用-」 09/16　第 4 回 SPARC Japan セミナー2010（RIMS 研究集会）「数学におけるデジタルライブラリー構築へ向けて」 09/24　第 5 回 SPARC Japan セミナー2010（社団法人 日本動物学会 第 81 回大会）「日本の学術情報流通　10 年後を見据えて」 10/20　第 6 回 SPARC Japan セミナー2010 Open Access Week「日本発オープンアクセス」 11/08- 09 SPARC Digital Repositories Meeting (デジタルリポジトリ	08/19　International Congress of Mathematicians (国際数学者会議) に出展 08/22- 26 American Chemical Society (ACS) 2010 年 秋季大会に出展 08/29-09/02 3rd EuCheMS Chemistry Congress（第 3 回ヨーロッパ化学会議）に出展

	03/16　第１回運営委員会	会議）（於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、 SPARC Japan 共催） 12/10　シンポジウム 「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」（於：東京大学　国立大学図書館協会と NII の共催） 01/14　第７回 SPARC Japan セミナー2010 「著者 ID の動向」 02/03　第８回 SPARC Japan セミナー2010 「世界における”日本の論文／日本の学術誌”のインパクト」 03/08　TIB（ドイツ技術情報図書館）/ ZB MED（ドイツ医学中央図書館）/ NII（国立情報学研究所）MoU 締結記念 講演会 「ドイツと日本における学術情報流通基盤の未来」（於：学術総合センター　東京ドイツ文化センターとの共催）	
平成 23 （2011）	10/06　第１回運営委員会	10/28　第１回 SPARC Japan セミナー2011 Open Access Week 「OA 出版の現況と戦略（ジャーナル出版の側から）」 12/06　第２回 SPARC Japan セミナー2011 「今時の文献管理ツール」ワークショップ 01/31　第３回 SPARC Japan セミナー2011「学術情報流通の新たな展開 ― 研究者・学会とオープンアクセス ―」 02/10　第４回 SPARC Japan セミナー2011「学術情報流通の未来を切り開く ― 電子ジャーナルの危機とオープンアクセス ―」 02/29　第５回 SPARC Japan セミナー2011「OA メガジャーナルの興隆」	08/28-09/01 American Chemical Society (ACS) Fall 2011 National Meeting & Exposition（第 242 回米国化学会秋季大会）に出展 (於：デンバー) 09/04-09 14th Asian Chemical Congress 2011 (14 ACC)（第 14 回アジア化学会議）に出展(於：バンコク) 10/26　2011 Open Access Korea(OAK) Conference での発表 (於：ソウル)

	03/27　第 2 回運営委員会	03/26　第 6 回 SPARC Japan セミナー2011「数学出版に関するワークショップ」（於：東京理科大学 Project Euclid 主催、日本数学会共催ワークショップ）	
平成 24 （2012）	12/10　第 1 回運営委員会 03/26　第 2 回運営委員会	05/25　第 1 回 SPARC Japan セミナー2012「学術評価を考える」 06/19　第 2 回 SPARC Japan セミナー2012「ジャーナルの発展をもとめて～プラットフォーム移築を中心に～」 07/25　第 3 回 SPARC Japan セミナー2012「平成 25 年度 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）改革」 08/23　第 4 回 SPARC Japan セミナー2012「研究助成機関が刊行するオープンアクセス誌」 10/26　第 5 回 SPARC Japan セミナー2012「Open Access Week ー 日本におけるオープンアクセス、この 10 年これからの 10 年」 12/04　第 6 回 SPARC Japan セミナー2012「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるのか～図書館のためのオープンアクセス講座～」 02/19　第 7 回 SPARC Japan セミナー2012「図書館によるオープンアクセス財政支援」	07/02-07 European Congress of Mathematics (ECM) に出展（於：クラクフ、ポーランド） 08/19-21 American Chemical Society (ACS) Fall 2012 National Meeting & Exposition（第 244 回米国化学会秋季大会）に出展　（於：フィラデルフィア） 08/26-30 4th EuCheMS Chemistry Congress（第 4 回ヨーロッパ化学会議）　に出展（於：プラハ） 12/26-27 RIMS 共同研究　研究会にて基調講演（於：京都大学）
平成 25 （2013）		06/07　第 1 回 SPARC Japan セミナー2013「SPARC と SPARC Japan のこれから」 08/23　第 2 回 SPARC Japan セミナー2013「人社系オープンアクセスの現在」 10/25　第 3 回 SPARC Japan セミナー2013「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：再利用と Altmetrics の現在」 12/19　第 4 回 SPARC Japan セミナー2013「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信－Think Globally, Act Locally」 02/07　第 5 回 SPARC Japan セミナー2013「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来」	08/06　第 1 回　OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ開催 10/02　第 2 回　OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググループ開催 12/04　SCOAP[3] と MOU を締結 01/27　RIMS 共同研究　研究会にて基調講演（於：京都大学） 03/02　COAPI Meeting へ参加　（於：カンザスシティー）

	03/24　第１回運営委員会		03/03-04 SPARC2014 Open Access Meeting 本会議への参加 (於：カンザスシティー) 03/13　第３回　OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキング グループ開催
平成 26 (2014)	01/15　第１回運営委員会 03/19　第２回運営委員会	08/04　第１回 SPARC Japan セミナー2014「大学/研究機関はどのようにオープンアクセス費用と向き合うべきか―APC をめぐる国内外の動向から考える」 09/26　第２回 SPARC Japan セミナー2014「大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて」 10/21　第３回 SPARC Japan セミナー2014「「オープン世代」の Science」 03/09　第４回 SPARC Japan セミナー2014「グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？」	05/21-23 COAR(Confederation of Open Access Repository) 2014 Annual meeting への参加　(於：アテネ) 06/09-13 OR2014 (The 9th Annual International Conference on Open Repositories)への参加　(於：ヘルシンキ)
平成 27 (2015)	08/04　第１回運営委員会 11/30　第２回運営委員会 03/24　第３回運営委員会	09/30　第１回 SPARC Japan セミナー2015「学術情報のあり方 - 人社系の研究評価を中心に - 」 10/21　第２回 SPARC Japan セミナー2015「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて - e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -」 01/19　第３回 SPARC Japan セミナー2015「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」 03/09　第４回 SPARC Japan セミナー2015「研究振興の文脈における大学図書館の機能」	04/15-16 COAR(Confederation of Open Access Repository) 2015 Annual meeting への参加　(於：ポルト) 05/18-20 ORCID-CASRAI Joint Outreach Conference & Codefest 及び ORCID Board Meeting への参加　(於：バルセロナ) 06/08-11 OR2015 (The 10th Annual International Conference on Open Repositories)への参加　(於：インディアナポリス) 11/03-06 ORCID Outreach Meeting & Codefest, November 2015 及び ORCID Board Meeting への参加(於：サンフランシスコ) 02/02-03 ORCID Board Meeting への参加　(於：ロンドン) 03/07-08 SPARC Meeting on Openness in Research & Education への参加　(於：サンアントニオ)

６ 刊行物一覧

６．１ 国際学術情報流通基盤整備事業(SPARC Japan)年報

〔日本語〕

国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC Japan）年報 平成 26（2014）年度
http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/annual/pdf/sparc_annual_2014.pdf

〔英語〕

SPARC Japan (International Scholarly Communication Initiative) Annual Report FY2013
http://www.nii.ac.jp/sparc/en/publications/pdf/sparc_annual_2013-E.pdf

６．２ SPARC Japan ニュースレター

〔日本語〕

・SPARC Japan NewsLetter 第 26 号（2015 年 11 月）
http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-26.pdf

・SPARC Japan NewsLetter 第 27 号（2015 年 11 月）
http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-27.pdf

・SPARC Japan NewsLetter 第 28 号（2016 年 1 月）
http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-28.pdf

・SPARC Japan NewsLetter 第 29 号（2016 年 3 月）
http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-29.pdf

〔英語〕

・SPARC Japan News Letter No. 25, Mar. 2015
http://www.nii.ac.jp/sparc/en/publications/pdf/sj-NewsLetter25E.pdf

６．３ SPARC Japan セミナー資料

【第 1 回 SPARC Japan セミナー 2015】（平成 27 年 9 月 30 日）

「学術情報のあり方 - 人社系の研究評価を中心に - 」
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20150930.html

「開会/概要説明」　駒井　章治　（奈良先端科学技術大学院大学）

「評価以前の問題：人文学・社会科学とは何なのか」
中尾　央　（山口大学国際総合科学部）

「社会科学の研究評価に求められる多面性：政治学と環境学の観点から」
野村　康　（名古屋大学環境学研究科）

「人文系の研究評価はどこを目指すのか？」 永崎　研宣　（人文情報学研究所）

「責任ある研究活動の推進と研究評価 」　中村　征樹　（大阪大学全学教育推進機構）

「英国における研究評価制度と人文系の学術研究」佐藤　郁哉（一橋大学商学研究科）

【第 2 回 SPARC Japan セミナー 2015】（平成 27 年 10 月 21 日）
「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて - e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -」
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20151021.html
「開会/概要説明」　安達　淳　（国立情報学研究所）
“Open Data is not Enough”　Mark Parsons　（Secretary General, RDA）
「「研究のバリア」を打破する研究基盤デザインと研究データ利活用」
北本　朝展　（国立情報学研究所）
「オープンなプラットフォームが研究に与える影響を帰納的に考える」
池田　大輔　（九州大学システム情報科学研究院）
「超高層物理学における研究データ共有」　能勢　正仁　（京都大学大学院理学研究科）
「日本の研究データ基盤　」　加藤　斉史　（科学技術振興機構）
「超高層大気研究のためのデータベース～IUGONET プロジェクトの活動～」
田中　良昌　（国立極地研究所）
「研究資源としてのデータセットの共同利用について」
大山　敬三　（国立情報学研究所）
「事務職員のためのオープンデータ入門」星子　奈美　（九州大学附属図書館）

【第 3 回 SPARC Japan セミナー 2015】（平成 28 年 1 月 19 日）
「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160119.html
「開会/概要説明」　三根 慎二　（三重大学人文学部）
「学術コミュニケーションにおける緩やかな変革と図書館の役割」
Jeroen Bosman　（Utrecht University Library）
「研究者向けソーシャル・ネットワーク・サービスの概説」
坂東 慶太（Coordinator for the Online Platform for Scientific Communication）
「研究用 SNS の利用：ResearchGate」鳥海 不二夫　（東京大学大学院工学系研究科）
「ブログは研究に役立つか？どのように？」
垂井 淳（電気通信大学大学院情報理工学研究科）

【第 4 回 SPARC Japan セミナー 2015】（平成 28 年 3 月 9 日）
「研究振興の文脈における大学図書館の機能」
http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160309.html
「概要説明」　星子 奈美　（九州大学附属図書館）
「オープンアクセス推進と研究支援～大学図書館の新たなチャレンジ～」

尾城 孝一 （東京大学附属図書館）
「研究支援としてオープンアクセスポリシー策定の意味するところ」
引原 隆士 （京都大学図書館機構長）
「オープンサイエンスの推進について」 真子 博 （内閣府）
「我が国の研究活動の振興に資する大学図書館の機能」有川 節夫 （前九州大学総長）

7　資料　ニュースレター再掲

ISSN 1883-826X
SPARC Japan NewsLetter
NO.26 2015 年 11 月

■ 第 1 回 SPARC Japan セミナー 2015
「学術情報のあり方-人社系の研究評価を中心に-」

2015 年 9 月 30 日（水） 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者：95 名

第 1 回 SPARC Japan セミナーは、人文社会科学分野の研究評価に関する最新の状況や英国の研究評価の状況について話題提供いただき、学術情報流通を支援する様々な取組みをふまえて、人文社会科学分野の研究評価やインフラ整備を含む研究支援に大学および図書館が果たせる役割や可能性について議論しました。

現各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。
（http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20150930.html）

講演

評価以前の問題：人文学・社会科学とは何なのか

中尾　央（山口大学国際総合科学部）

人文学とは何かという問題に関して、1）人文系がそもそも多様なもの、2）人文系の評価問題という問題設定も良くない、3）評価は誰がすべきなのかという論点から検討を行った。人文学は独自の使命があり「スローサイエンス」と言われることもあるが、実態は図書だけではなく論文も重要なこともあれば、一律にスローである「べき」でもない。人文学は単一ではなく多様なあり方が可能ではないか。実際に、人文学・社会科学・自然科学という分野思考が当てはまらない事例もあり、境界も曖昧になりつつある。こうした多様化する研究のあり方を評価する基準をどうするかは、各分野に細分化されるものではなく学術全体の評価問題であろう。数で評価できるできないに関わらず、その評価を研究者側は評価側に任せてしまうのではなく、両者が情報交換などを行いながら多様な評価基準の設定をしていくことが必要だろう。

社会科学の研究評価に求められる多面性：政治学と環境学の観点から

野村　康（名古屋大学環境学研究科）

政治学分野では、自然科学分野と比較して研究成果が数値に表れにくい傾向がある。本（単著）や紀要に重きを置く文化があり、デジタル化は完全ではない。論文も、一編が長い、共著が少ない、日本語が多いといった特徴があることから、一般に社会科学分野では、成果数や被引用数が少なくなる傾向にあり、分野ごとの発表形態の特性を踏まえた評価が必要だろう。その際に、論文数などの量的評価に傾斜すれば、業績を出しやすい研究へと偏りが生まれ、学術的発展にマイナスになる可能性がある。社会科学分野では、社会理解と社会的課題の解決へ貢献といった研究のインパクトも重要であり、学問の発展やアウトリーチの貢献を考えた評価も必要である。環境学分野では、既存の大学評価基準（ランキングなど）が活動の障害になっていると言われており、研究の方向性や実際の貢献も評価すべきといった議論がある。アメリカにおいては、STARS といった代替的な評価指標が利用されるようになってきている。社会科学の研究評価は、学問的特性と社会的課題を考慮した多面的なものであることが必要だろう。

「人文系の研究評価はどこを目指すのか？」

永崎　研宣（人文情報学研究所）

人文社会系研究は、研究者数および研究費で見ると、学問分野全体ではわずかでしかない。一方で、科学基本計画など各種政府による文書においては、人文社会系への様々な期待がなされている。人文系の評価における課題には、「世間」と「業界」での評価の問題があるが、前者は即時に定まるとは限らず、後者は研究分野・大学人事・大学ランキングでの評価軸のずれ、これらの社会軸と社会からの要請との対応関係、新しい研究動向への評価軸などの課題を抱えている。これらの課題の出口として、定量的および定性的評価に対する工夫が求められる。J-Stage や CiNii Articles などの収録刊行物に対して引用情報を提供することは一つの方策だろう。デジタル人文学分野の学際領域学会ではこうしたことに様々な角度から取り組んでいるので参考にされたい。また、米国の文学・歴史学の既存の学協会ではデジタル成果物についての評価ガイドラインを公開しており、これも参考になるかもしれない。

責任ある研究活動の推進と研究評価

中村　征樹（大阪大学全学教育推進機構）

研究不正や研究倫理教育という観点から、研究評価を検討する。研究不正への対応が進んでおり、文科省のガイドラインでは、大学などの研究機関の責任が着目され、例えば研究倫理教育や研究データの保存・開示の実施など組織的対応が求められるようになっているが、十分なのか。研究不正には、捏造・改ざん・盗用（FFP）の特定不正行為に加え、二重投稿や不適切なオーサーシップなども含まれるが、米国では研究不正の定義を巡る議論の過程で、連邦規律で研究不正は FFP に限定され、その他の受容されている研究慣行からの深刻な逸脱行為は含まれていない。しかし、FFP 以外の「好ましくない研究行為」に対する対応への問題提起もなされており、さらに責任ある研究活動の促進（RCR）へと議論が移りつつある。FFP 以外の不適切な行為は、頻度の差はあれど幅広く行われているが、RCR を促進する要因である研究環境・報酬システム・教育プロセスの側面からアプローチする必要がある。また、「Research Waste」ではない質の高い研究を促進していくことも同時に考えることが求められる。その際には、質の高い研究を担保する研究システムや研究者の評判を組み込んだ評価システムの構築が論点になるだろう。

英国における研究評価制度と人文系の学術研究

佐藤　郁哉（一橋大学商学研究科）

英国における研究評価事業は 1986 年の Research Selectivity Exercise に始まり、RAE(Research Assessment Exercise)は 1992 年から 2008 年にかけて 4 回実施、2014 年には REF（Research Excellence Framework）が実施された。RAE/REF への参加大学数は多く、2014 年は約 5 万人の研究者分の業績、約 20 万件を審査することになり、審査に膨大なコストを要した。評価が得られなければ、研究資金が得られないので年々競争が激化し、現在では 4 段階評価の最高評価を得なければ意味がないレベルにいたっている。また、評価は、研究大学と教育大学の機能分化をより拡大させているとの批判がある。評価の高い大学は、評価が呼び水となり、外部資金獲得が有利になっている。

RAE/REF に対する好意的な見解としては、1)政府資金の使途に関する説明責任の遂行、2)実績主義にもとづく良質な研究への支援、3)競争原理による効率的な研究活動の促進、などの実現が示されている。一方で、高評価を得るために戦略的な対応が行われていることに対する批判もでている。具体的には、スター研究者の安易なヘッドハンティング、評価を得やすいテーマへの研究テーマ偏重、新規性の乏しい論文の量産などである。また、評価に影響しない、教育や学内行政への軽視も批判されている。

社会科学分野では、書籍よりも論文での研究成果のアウトプットが増える傾向にあり、研究者が評価にあわせて書籍よりも論文を優先させている可能性がある。日本にとっての教訓は、1)「選択と集中」が目指す最終的な目的の明確化、2)政策目標（目的）と評価プロセス（手段）のすりあわせ、3)評価の効果と意図せざる結果に関する慎重な検討、4)評価プロセスと評価にもとづく資源配分に関する情報開示、5)「評価についての評価」の実施、がある。

パネルディスカッション

＜大学、大学図書館の役割、可能性＞

モデレーター：駒井　章治
（奈良先端科学技術大学院大学）

パネリスト：竹内　比呂也（千葉大学）／中尾　央（山口大学）／野村　康（名古屋大学）／永崎　研宣（人文情報学研究所）／中村　征樹（大阪大学）／佐藤　郁哉（一橋大学）

パネルディスカッションでは、評価のあり方、新しい形の評価を支援する仕組みなどについて様々な意見が交わされた。以下に紹介する。

佐藤氏：何のための評価か、誰のための評価か、を考えることが重要である。定性的なものをどう評価するかを考える必要がある。

竹内氏：そもそも、評価を行うための基盤が問題である。STM 分野は、引用数で競われることが多く、それが研究評価の実態に近似していることを多くの人が理解している。一方で人社系では、引用数が研究評価の実態を反映していない。人社系において、多くの人が納得できる指標を考えると、そもそも学術情報のエコシステムに課題があることに気づく。日本の人社系では、まだ電子ジャーナル化すら進んでおらず、OA 以前の段階である。学術情報のエコシステムの整備が、多様な評価の実現につながると思う。

駒井氏：日本では、事前に 100%実現可能であることを確認してから何かを実行する傾向があるが、できるところから始めてもよいのではないか。Facebook の「いいね！」や、ソシオメトリック・テストのように好きな論文を挙げてもらう等、

新しい評価方法もありえる。アウトリーチを評価する方法も考える必要があるだろう。さまざまな評価を可能にするために、プラットフォームが必要であろう。アイデアがあれば、ご意見をいただきたい。

フロア：環境学は様々な側面をもっており、まさに多分野を包含するという意味では学問分野の縮図とも考えられる。環境学の中では、それぞれ異なる特性をもつ各分野をどのように評価しているかを伺いたい。

野村氏：環境学では、各分野の専門家の判断に任せられている。一方で査読誌に投稿するなど、国際的なルールに合わせる取り組みも行っており、その実現のために新たに査読誌を創刊してもいる。

フロア：評価のもとになるデータがなければ、議論は始まらないだろう。当事者が自身の行っていることをリスト化して公開すればよいと思う。評価は評価者が勝手にやるだろう。

フロア：Facebook の「いいね！」機能は、技術的には問題なく機関リポジトリに実装できるだろう。また、かつて CiNii が担っていた引用文献のフォローも機関リポジトリで引き継げるだろう。

フロア：評価者が評価基準を示すと、研究者はそれに合わせて行動してしまうので、気をつけなければいけない。たとえば論文数が基準と示せば、論文を量産するだろうし、本を評価基準とすると本を執筆するだろう。

佐藤氏：何のための評価であるかを明確にしなければ、技術先行で進んでしまうことを危惧している。たとえば university assessment の art 分野では、Exhibition が評価方法となっている。つまり peer による評価が行われている。

駒井氏：この場で答えは出せないが、評価のあり方について考え続けることが必要であり、これからもこういう場を持ちたい。

参加者から

☺ 何度もポイントを突かれ、とても刺激的なセミナーでした。私には図書館員と研究者ふたつのスイッチがあるようで、今回のセミナーでは後者のスイッチが入りました。発表者のほとんどが研究者で、そのバランスが絶妙でした。研究者の分析が的確で、正と負の側面両方に目配りが行き届いていたことにとても満足を覚えました。「スローな自然科学もある＋評価が定められたおかげで科学が進歩した側面もある」（中尾氏）、「評価基準を定めた途端、評価がゆがむ」（佐藤氏、安達氏）、「評価基準を明示的にしてこなかった人社系にも問題があった」（竹内氏）という視点が特に面白かったです。また、多様性を考慮したいけどそうすると収拾がつかなくなるというジレンマも強く感じました。「分かる」「確かにその通り」と感じた回数から判断するなら、今までいちばん刺激的な SPARC Japan セミナーだったかもしれません。参加させていただき本当によかったです。

（所属：大学/図書館関係）

企画後記

☺ 大学再編を機に物議をかもした「文系不要」説。同問題を通して文理を問わない学問の在り方が今改めて問われているのではないだろうか。物事には多様な側面があり、多元的に見る必要性があることを学者はよく知っている。評価もしかりであろう。このようなものの見方は学者が責任をもって改革し、本質を見極める術を示す必要があるのではないか。

駒井　章治（奈良先端科学技術大学院大学）

☺「人文社会科学系の研究評価」は、とても重要ですが難しいテーマなので企画段階では、どこまで有意義なセミナーにできるか心配もありました。しかし、さまざまな切り口でのご講演や、フロアからのご意見を聞くことができ前進するための手がかりが得られた気がします。すべての分野の方が納得できる評価指標づくりは難しいですが目的に応じてできるところから始めてみること、そして指標ができた後も、形骸化しないように常に評価を評価し続けながら進むことが大切なのだろう、と感じました。

横井　慶子（東京大学附属図書館）

☺ 今年になって各種メディアで炎上し、所属組織でまさに問題になっているため、個人的には関連度の高いテーマでした。容易に解が導き出せる問題ではありませんが、今後も各所で継続して議論がなされ、新しい人文社会科学系のビジョンや在り方を構築していくことが求められるのだろうと思います。今回のセミナーがその一助になれば幸いです。

三根　慎二（三重大学）

ISSN 1883-826X
SPARC Japan NewsLetter
NO.27 2015 年 11 月

■ 第 2 回 SPARC Japan セミナー 2015
「科学的研究プロセスと研究環境の新たなパラダイムに向けて - e-サイエンス，研究データ共有，そして研究データ基盤 -」

2015 年 10 月 21 日（水） 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者：100 名

“研究データ”は、大学などの研究機関や学術情報流通のコミュニティにおいて、昨今取り上げられている特に重要なテーマの一つとなっている。これまで研究データは、研究過程において生成され、研究者自身やその所属する研究コミュニティが所有してきた。90 年代以降の情報通信技術の革新は、とりわけインターネットとウェブ、その後の無線通信とモバイルにおける技術基盤のコモディティ化によって、様々な研究分野において大規模で多種多様な研究データを生み出し、共有と処理を容易にした。このような研究データをとりまく環境の変化は、科学的研究プロセスの変革を予測した“第 4 のパラダイム”の指摘につながっていく。これは、e-サイエンス、データ駆動科学、データ中心科学の意味するものと同じといってよい。並行して、学術界において、特に論文を対象としたオープンアクセス政策が広範に普及、定着した。オープンという概念は研究データの文脈にも影響を与えることとなり、ここ数年、オープンデータやオープンサイエンスの名の下、データ共有が謳われるようになってきている。今、我々はこの新しい科学のパラダイムに向かって研究データ共有という新しい問題に直面しているのである。

本セミナーは、研究データに関するステークホルダー、すなわち、研究者、研究マネージャー、エンジニア、出版者、および政府関係組織、そして、研究支援に責任のある図書館員、さらにこの新しい科学のパラダイムに関心のあるすべての人が、このトピックの本質を理解し、研究支援環境として何が必要であるかを議論するきっかけを提供することを目的に開催された。

現各登壇者の講演要旨，配布資料等を含め詳細は，SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。
（http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20151021.html）

第 1 部 基調講演

“Open Data is not Enough”
Mark Parsons（Secretary General, RDA）

第 2 部 サイエンスと研究データ

講演

①「研究のバリア」を打破する研究基盤デザインと研究データ利活用
北本 朝展（国立情報学研究所）

②オープンなプラットフォームが研究に与える影響を帰納的に考える
池田 大輔（九州大学システム情報科学研究院）

③超高層物理学における研究データ共有
能勢 正仁（京都大学大学院理学研究科）

パネルディスカッション

「研究データ共有は今後どうあるべきか？」
モデレーター：武田 英明（国立情報学研究所）
パネリスト：第 1 部 第 2 部登壇者

武田氏：研究データのクレジットを誰に与えるか？またどうあるべきか？

Parsons 氏：データサイテーションは共有の動機になると考える。誰が責任を負うかという事が重要になる。RDA のプロジェクトにおいても色々な役割を与えている。データサイテーションの目的が変化してきている。

北本氏：サイテーションはクレジットが目的というのが理想の姿だと思う。しかし、再現可能性の方に意識が向かってしまうのは、現状のジャーナルの仕組みから発想しているからだろう。論文のサイテーションでクレジットは満たされていると考えると、データのサイテーションに意識が向かわない。とはいえ、データへのクレジットをどうやって行うかはやはり大きな問題である。それに関連して、各学会において「巨人の肩」賞を作ってはどうかという提案を以前に行ったことがある。論文だけではなく、いかにデータ共有やデータインフラを進めたかも含め、どれだけ「巨人の肩」を作ったかという基準から貢献度を評価できるのではないか。

池田氏：マークさんの話でダイナミックデータサイテーション WG の話があった。3 月の RDA で初めてダイナミックサイテーションの話を聞いた。データセットの任意の部分をサイテーションできるようにすることで、データセット全体ではなく部分的に引用することができるので、その部分の対象者にクレジットを与えることが出来る。賛否はあると思うが、テクニカルな面からはそういう事が可能になると思う。

武田氏：サイテーションまで話が広がると少し大きくなる気がする。単純に誰をクレジットすべきか？

能勢氏：私は、研究もデータの管理も職務としている。我々の研究分野ではデータシェアリングは当然のことになっており、いままでデータにクレジットをということは考えなかったが、データを取った人、データを管理している人、データを提供した人にはクレジットを与え、メトリックスのような形で業績を評価できるのが理想的ではないか。

武田氏：これからデータがもっと広い範囲で活用されることを考えると、クレジットは明示したほうが良いのではないか。

能勢氏：私が DOI やデータなどに関わっているのは、データ取得者やデータ提供者へのクレジットや評価を計量化できるようにしていきたいから。データサイテーションの文化を進めていくことで、きちんとしたクレジットに反映することが出来るのでは。

武田氏：今の技術ではクレジットの量が増えても問題なく表示できるので、クレジットをしっかりと行う事は、今後のデータシェアリングの方向性として良いのではないかと思う。

武田氏：データをシェアするときに誰がどのように手助けしたらよいか？

能勢氏：ある程度、ドメインの研究者が関わらざるを得ない。内容がわからないと提供できない。研究者と大きなデータを扱えるデータに広い視野を持っている人（データキュレーター）が必要。

Parsons 氏：能勢さんに同意。専門知識なしには行えない。

北本氏：キュレータが重要なのは同意。ただし、インフラという建築・土木のアナロジーで考えれば、アーキテクトやシビルエンジニアのような多様な専門家も必要。そのような人たちと情報学の専門家との共同作業になるのでは。

池田氏：論文をどうやってシェアするかということは、arXiv.org のようにドメインごとにデータベースを構築して行っているが、後発のところは苦戦している。本来それは研究者の仕事ではないのではないかと考える。データの保管は義務として大学が担って、キュレーションは専門家が行うような二段階になるとよいのでは。

安達氏（フロア）：日本では研究不正の話とオープンデータの話がごっちゃになっているが、欧米ではどうか？また、個人情報の扱いについて伺いたい。

Parsons 氏：二つの問題は分けるべきというのは同意。しかし、この問題は教育とか倫理的な境界線があるが深く関わっている。データサイテーションは全てを解決するわけではない。データは組織的に作成され集中化されるべき。

池田氏：私は、機関に任せてもよいのではと思う。個人情報の方で合わせて言うと、オープンにするデータとさせてはいけないデータの選択は情報の力で何とかなる。一方で、オープンに科学を進めるというだけだとビジネスモデルとして成り立たないのでは？機関リポジトリの数がこれだけ増えたのは、機関に任せたからではないか。

安達氏：データベースは継続的にメンテナンスしないと陳腐化してしまう。データキュレーターなどに任せれば良いというものでもない。成功しているデータセットは組織的に作られ、集中化され管理している。個々の研究者にデータメンテナンスの努力を求めるべきではない。日本ではそれを支える事ができる基盤があるのでは。

武田氏：データのシェアについては研究者だけに任せるべきではないというのは共通の認識になったのではないか。答えは一つではないと思う。キュレーションのような仕事があるという認識と、コンピュータサイエンス力を積極的に借

りるべきだということ、またコミュニティや分野ごとに明示的に活動を作っていくと言うようなことが一緒にならないとうまく回らないということかと思う。
武田氏：データを使うときのライセンスについて
Parsons 氏：公的な資金で集めたデータは公共財であり、ある一定の倫理の下でCC0（クリエイティブコモンズ0）でよいのではないか？パブリックドメインとするべき。
北本氏：いろいろなチョイスがありうるが、無限にチョイスがあると扱いづらいので、数種類のバリエーションに整理していけないか。CC0 というオープンデータは、選択肢の分布の中でオープン化を極限まで進めたものと捉えられる。
池田氏：ライセンスよりもアクセス制御の仕組みが必要。
能勢氏：自然科学データに限られるかもしれないが、公的資金で得たデータはオープンであるべき。ただし先取権という考え方は必要ではないか。

第 3 部　日本の研究データ基盤

講演

①日本の研究データ基盤
加藤　斉史　（科学技術振興機構）
②超高層大気研究のためのデータベース
～IUGONET プロジェクトの活動～
田中　良昌　（国立極地研究所）
③研究資源としてのデータセットの共同利用について
大山　敬三　（国立情報学研究所）
④事務職員のためのオープンデータ入門
星子　奈美　（九州大学附属図書館）

パネルディスカッション

「研究者の期待と研究データ共有への関わり」
モデレーター：　蔵川　圭　（国立情報学研究所）
パネリスト：　第 3 部登壇者

蔵川氏：研究データ基盤をどう担うか？歴史的な観点やニーズの変化などそれぞれの立場からお聞かせ願いたい。
加藤氏：研究データの DOI 登録の中で明確になってきたことは、DOI を付与することによって最低限識別できるようにし、メタデータについてもシンプルで、ドメインによっては物足りないかもしれないというのが現状。一番近い将来の目標としては、ドメインごとの活用についてはそのドメインにお任せするが、論文と研究データのような異なる種別のものや別のドメイン同士を結びつけるという役割を果たしたいと考えている。
蔵川氏：JST の JaLC はビックインフラだと考えるが、ユーザーからのニーズに変化があって論文からデータにも DOI をというようになったと理解するがそのような声はあったか？
加藤氏：一つはビックインフラストラクチャというお話があったが、日本から出て行くものを逃がさないで集めよう思想で JaLC の一つの基盤として位置づけている。もう一つは、論文から研究データへという中で、識別してそれを評価に使いたい、何処で引用されているかきちんと把握したいというようなニーズが届いているので、DOI 付与によってそのあたりを定量的に評価できるように取り組んでいきたい。
田中氏：昔は自分でとったデータを解析すれば論文を書けたが、現在ではとにかく一つの現象に対して色々なデータを使って検証をした方がより成果が出るというスタイルになっている。そういった意味で、IUGONET のニーズは大きくなってきている。
大山氏：一つはデータベースの規模と精度の変化。以前は限られた条件下での小規模データを丁寧に作る事を意識していた。現在は統計的な手法が発達したこともあり、大規模な生データを切り口を変えて分析する事で何かを生み出す手法が主流となった。もう一つは、従来は狭い分野の技術の研究で閉じていたが、最近はメディアをまたがる研究や人や社会との関わりに関する研究テーマが大きくなってきた。情報学では、人間や社会が研究対象になる。
星子氏：図書館へのデータに関する相談は、URA や事務部門から受けたことはあるが、研究者のニーズについては現時点では把握できていない。

蔵川氏：研究データのオープンを進める上で実務上何かクリアにしなければならない事や注意点等はないか？
加藤氏：一つはユースケースが少ないのでメタデータのデータセットが適正なのかの検証が進んでいないということ、もう一つは全体の流れが確立しつつあるので、スムーズな展開を心がけていきたい。
田中氏：IUGONET では、ライセンスやクレジットについては気にしている。IUGONET 自体でデータポリシーを制定しているわけではなく、各データのポリシーは各 PI が決めている。現在は利用者のモラルに依存する部分が多く定量的に把握することが出来ていないので、そのあたりはプレッシャーになっており、解決したい。
大山氏：データを提供してもらう時に条件を慎重に詰めるようにしている。

星子氏：ディスカバリーサービスの導入により、貴重書等の画像データへのニーズが高まっており、データ管理の重要性を実感している状況である。

参加者から

（大学/図書館関係）

・研究分野によって温度差があることが実際どういうデータを扱っているかを聞いてよくわかった。

・全てを理解できたというよりも、現在の傾向や状況を知ることができました。また研究者の方の世界におけるデータについての考え方を知ることができたことがよかったと思います。

（大学/大学・教育関係）

・データ作成者のクレジット、費用負担など、重要な問題の存在を再認識した。

（大学/研究者）

・来年の RDA プレナリーに向けての情報が得られました。

（その他/図書館関係）

・分野によってコンテキストが異なり、議論の方向性を理解するのに努力が必要でした。

・オープンデータ、オープンサイエンスについて研究者の視点からの話を聞きたかったので、大変ありがたかったです。

（その他／大学・研究関係）

・オープンデータの実態、実例について現状を把握することができた。

（その他/その他）

・RDA についてよくわかった。構成、他テーマもよかったで　す。

企画後記

☺ 機関リポジトリのムーブメントが定常状態に入って、ここ 3 年ぐらいの間で学術情報環境に関わって何か取り上げるべきことと言ったら研究データぐらいだろうと思っていたところ、SPARC Japan の企画ワーキングの依頼を頂いた。著者の名寄せを中心とした電子図書館を研究テーマとしていた身としては、研究データというのは今でも遠い存在である。サイエンスを対象とした研究データは、研究で取り扱うモデルの観測変数や潜在変数の数値列で、そのモデルを理解しなければ意味を理解することは不可能である。少しは対象データに関するモデルを理解しようと、分野の教科書を漁ってみるが、それを理解するために今度は数学の復習へとさらに深みにはまる。文献のメタデータはあくまで本や記事のモデルについての記述であって、研究データのメタデータは分野のモデルについての記述である。図書館員が文献リポジトリのメタデータを難なく取り扱うことができるのは、それが本や文献に関するものであり、図書館員はその専門家だからである。研究データも分野の研究者でない別の専門家が扱えるようにと、たとえばパッケージのように扱われる慣習ははたして今後訪れるだろうか。

蔵川　圭（国立情報学研究所）

☺ 本セミナーに企画および発表者として携わったことは、図書館の日常業務で具体的な実務へ落とし込む段階には至っていない、研究データ管理という大きな課題を考える機会となりました。Mark Parsons 氏の基調講演では、RDA の活動内容や今後の方向性について興味深いお話をいただきました。また、研究者の方々のご発表では、多様なデータとその管理・共有の実例を分かりやすく教えていただき、研究データをより身近なものとして捉えることができるようになりました。多くの皆様にセミナーへのご協力、ご参加をいただきましたこと、御礼申し上げます。

星子　奈美（九州大学附属図書館）

☺ 研究者の方々と共同で企画するセミナーということで、とても刺激になりました。また、研究者から見たオープンデータ、オープンサイエンスに関する図書館職員への期待は現状あまり高くないと感じました。しかし、図書館職員はこのテーマに積極的に参画し、研究支援に関わる図書館の立ち位置を確立して行かなければならないのではないでしょうか。そんなきっかけとなるセミナーになったと思います。

梶原　茂寿（北海道大学附属図書館）

SPARC Japan NewsLetter
ISSN 1883-826X
NO.28 2016 年 2 月

■ 第 3 回 SPARC Japan セミナー 2015
「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」

2016 年 1 月 19 日（火） 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者：87 名

本セミナーは、新しい学術情報のプラットフォームについて、概要と最新動向を把握するとともに、研究者の立場から実際の活用事例を紹介してもらい、研究活動におけるプラットフォームとしての可能性や課題および大学図書館がいかに関与していくことができるかを議論することを目的に開催されました。

現各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。
（http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160119.html）

講演

概要説明
三根 慎二（三重大学人文学部）

研究成果を残す「場」はこれまで多くの学術出版社や学協会であった。サービスポータルやアクセスプラットフォーム、端末プラットフォームがこれらであるが、現在では新しい物が続々と現れてきている。研究者向け SNS、Google Scholar や ReadCube がそうである。Nature による調査によれば、多くの研究者が様々なものを利用している。一方で懐疑的・保守的な意見もある。信頼性がないことや、研究のコアな部分と関係がないことなどがその理由となっているようである。ではどのように図書館側は関わっていけばよいのか。

"The slow revolution in scholarly communication and how libraries can adapt their perspective"
Jeroen Bosman（Utrecht University Library）

1964 年の新幹線開通とともに生まれ、日本に対しては先端を進む国として非常に興味を持っていた。テクノロジーは学術コミュニケーションにも貢献できると考えている。まずはテクノロジーについて。はじめは 20 しかなかったものが 100 を超える新しいツールが数ヶ月のうちに現れた（101（「ワン・オー・ワン」）ツール）。文献検索、分析、執筆、出版、アウトリーチ、評価という事柄にこれらのツールは利用されている。現在は 600 を超えるツールが有る。そもそもは出版社が作ったものであるが、研究者自身が開発したものもあり、オープンツールなので誰もが利用可能である。「G－E－O モデル」というシンプルなモデルを用い、学術コミュニケーションツールの利用を考えるにあたり必要な視点は、オープンであるか、効果があるか、透明性が高いか再現性があるかである。もちろんこれには時間がかかるが、正当な評価により不正が防止される。本会合のような会議が世界中で行われ、各国で議論が進んでいる。

もう一つ、研究のワークフローがどのように進むかというと、「準備－発見－分析－執筆－出版－アウトリーチ－評価」の円環であるが、実際はもっと複雑になる。オープンサイエンスにより、これらの順序が変わってきている。プランの段階で世に語りかけられるようになってきたし、研究のパートごとに発表できるようになってきた。さらにこれにより信頼性を上げることにもつながる。さまざまなツールをつなげた、幾つかのモデル（伝統的、現代的、革新的、実験的）もある。

アンケート調査の予備的結果から、実際に研究者はどのように使っているのかが明らかになってきた。2015 年末までのところ、回答は 8,028 件であった。オープンアクセスを支持するかという質問では、国別ではベネズエラでの支持が高かったが、何故かはもう少し深い分析が必要である。最終的なデータが集まった段階で、多くの人に個別に分析して貰う予定である。例えばアウトリーチでは、若手は Twittter をシニアよりも多く利用している。文献処理では EndNote が一番多く、Mendeley やその他を使っている人々が続いた。

図書館としてどのように役立つことができるかをそれぞれの段階でリスト化したので、今後の役割を議論したい。伝統的な強みを固めることにとどまらず、新しいツール開発の人材起用も重要である。101 プロジェクトの生データ活用のプラットフォームを紹介したが、図書館のさらなる行動を促したい。日本からの回答は 250 にとどまっており、アジアの一部の国からの反応もなかなか集まらないのが現状である。個別に調査を行うことも可能なので、連絡がほしい。これは現状を知り、今後の方向性を見ていくゴールではなくスタートである。

研究者向けソーシャル・ネットワーク・サービスの概説

坂東 慶太 （Coordinator for the Online Platform for Scientific Communication）

研究者向け SNS について図書館目線で皆さんと一緒に考えたい。ビジネス向け、パーソナル向けに遅れること数年、研究者向け SNS については 2008 年に同時にスタートした ResearchGate・Academia・Mendeley が多くの研究者に利用されているようだ。理系の研究者は ResearchGate の利用が多い傾向である（2014 年 8 月の調査）。文系も同じだが、文系は Academia も多いようである。101 の調査（2015 年 6 月の段階）では、研究成果を公開するプラットフォームとして機関リポジトリを利用するという回答が多いようだが、回答者数は図書館員が多かったようである。ResearchGate は、機関リポジトリと同じくらい利用者が多いようである。

リポジトリ、コラボレーション（アノテーション）、研究者の評判の数値化、機関の評判の数値化についても言及したい。研究者向け SNS は、長期保存の観点などからオープンアクセス・リポジトリでないという否定的な意見もあり、機関リポジトリを取るべきという考えもある。アノテーションに関しては出版社を多く巻き込んでオープンアノテーションという動きが加速されており、独自のアノテーション機能を擁する研究者向け SNS の今後の動向を注視したい。数値化に関しては異論も多くある。利用する側は、悪い面も知った上で使わないと足元を救われる可能性がある。一方、Altmetrics の観点からは、数値化にはより多くのデータが必要であるという意見もある。図書館として、機関リポジトリや研究者情報システムと研究者向け SNS の連携などについて考える必要がある。

研究用 SNS の利用：ResearchGate

鳥海 不二夫 （東京大学大学院工学系研究科）

ユーザーとして、またソーシャルメディアの研究者として、ResearchGate をどのように利用しているのか、その利点は何かを話したい。①STAT 機能により自身の論文の評価を日常的に知ることができる。②Upload は論文シェアに便利に使える。③Request することもできる。④実験結果の共有も可能。⑤Jobs では世界の求人がみられる。⑥Question は Q&A ができる。また、⑦履歴書の自動作成という機能もあり、意外と便利である。

ソーシャルメディアの成功と失敗があるが、「使われる」条件とは何か。ユーザーが情報をみんなで共有することに価値がある。公共財ゲームによる表現（協調か裏切りか）で理解でき、みんなが裏切る方に解がある。みんなが協調する方向にさせることを促進することでユーザーを獲得できるのではないか。このとき、協調したユーザに何らかの報酬を与え、さらに報酬を与える人に報酬を与えるとうまくいくことが多い。これをもとに ResearchGate を評価してみると、協調促進という観点から優秀なシステムが実現されているように見える。

ブログは研究に役立つか？どのように？

垂井 淳 （電気通信大学大学院情報理工学研究科）

2010 年に起こった数学領域でブログが使われた例がある。P≠NP 予想をめぐって、200 コメント/日のペースで議論を行った中で、100 件は本気の数学者によるコメントだった。Deolalikar 氏の論文について、Lipon 氏が研究ブログで取り上げたことから約 5 日間の議論が続いた。結果的には重要な欠陥があるとのことで収束した。早い段階でチューリング賞受賞の Cook 氏が賛同したことも影響した。Tao 氏や Gowers 氏も議論に参入し、Tao 氏の Wiki ページもサマリーとして機能した。一般の人が面白がってくれることは嬉しい。解説するメディアが入ってくれるととても機能する。欧米の科学ライターは本当に早い。そもそもなぜ騒ぎになったかといえば、多領域の概念を組み合わせると主張し、さらにスター研究者たちが参画した。これにより注目が集まった。

ブログが役立つ点としては、ニュースを知ること、プレゼン動画で詳しく効率的に理解できること、ソーシャル・ネットワーキングとしては他者とつながっているのが嬉しいことがある。一方、落ち着かないことや、集中できないことはマイナスである。別証明の発表にも有用ではないか。

パネルディスカッション

モデレーター（兼パネリスト）： 林 和弘
（科学技術・学術政策研究所）
パネリスト： Jeroen Bosman （Utrecht University Library）
／坂東 慶太／鳥海 不二夫 （東京大学）
／垂井 淳 （電気通信大学）／三根 慎二（三重大学）

林氏：SPARC Japan においては、Mendeley を開発した Victor Henning などをお呼びしてソーシャルメディアや新しい学術情報流通サービスに関するセミナーを何回か行ってきた。。

かつての論考で学術コミュニケーションサービスの発展を段階的に見ると、1 段階目としては紙の機能の電子化がおこり、2 段階目にはそれが漸次的に発展するが、3 段階目は、そのサービス本来の目的に合わせた非連続な変革が起こる、ということを述べたことがある。例えば、ピアレビューを出版後にオープンに行うという試みも非連続な変革とみることができる。そして、学会運営に携わった経験から、SNS が学会の使命である研究者のコミュニケーションの場を非連続に創り出し、学会の脅威になりうるという視点が以前からあった。幸か不幸か Bosman 氏の話から当時思ったよりは緩やかにこの変革が進んでいることがわかった。一方で研究者は積極的にこのようなツール、新しいサービスを利用する者としない者に二分できる。学術情報流通の革新に関してギャップを感じているのではないだろうか。数学などでは昔からブログなどが活用されていたので、新しいものを使わなくてもいいのでは？オランダではどうか。

Bosman 氏：一部の分野ではリポジトリ機能を使っているところはある。物理や経済学ではプリントでシェアが良しとされている。将来的には新しいツールが出て、変わってくるかもしれない。

林氏：次世代への兆しはまだ？

垂井氏：SNS の付加価値はあるかもしれないが、その仕組が透明でない。単純な方がいいと考えている。

鳥海氏：どの世代も面倒くさがり。仕方がないからやっている。SNS だと少しのインセンティブをもたらすので、やりやすくなるのでは。

林氏：公共財理論の考え方は機関リポジトリ改善に役立つのでは？

三根氏：機関リポジトリとしてはフィードバックになるものがないので、やりたがらない。

林氏：機関リポジトリのウィークポイントが改めて顕在化したとも言えるのかもしれない。フロアからもどうぞ。

フロア1:論文を SNS に載せてもいいのか？著作権について、出版社のポリシーを確認してくださいとお願いしている。機関リポジトリのメリットは著作権処理か。

林氏:お互いが順守すればウィンーウィンになる。

フロア2:オープンアクセスの論文でなければ SNS に登載するのはダメ。コピーライトの件、利用頻度の把握についても問題が出てくる。出版社グループではグループを設けてガイドラインを作っている。SNS グループと出版社との合意が将来的には取れるようになればいいと思っている。

坂東氏:利用者側は自発的に使いたいと考えているように思う。リポジトリの方としても壁になっているのでは？著作権の問題は図書館の役割としてできるのではないか。

Bosman 氏:利用者側としては SNS がふつうのことになっていくので、それはモチベーションになり得なくなってくる。研究者の評価の尺度を考える必要があるのでは？

林氏:こういう状況の中でどのように進んでいくのか。

フロア3:研究者の情報共有システムは相手は研究者。図書館側ではいろんな人を相手にしたいと思っている。SNS とリポジトリがどのように連携していくのかが大切か。

林氏:ベンダーとして今日の話題提供とこれまでの議論はそのように捉えているか？

フロア4:研究者用のいろんなツールを作っている会社の者だが、研究者のニーズがつかみにくくなっている。

林氏:600 ものツールを見てきた人として何かコメントはありませんか？

Bosman 氏:既にあるものを見て予想することも大切だが、ビジョナリーになり未来を見ることも大切。

林氏:この手のツールの開発の裏話でよくあるのは学者が必要なものを個人的に作ることが多い。

フロア5:ソフト開発の世界での革命的変化を目にしてきた。保存したらその場でバグが有るかチェックされて、公開される。ワークフローが自動化している。研究の場面でも使える場面があるのでは。101 プログラムの中に研究の中でのコミュニケーションをサポートするものはあるのか？

Bosman 氏:共同執筆用のツール等があるが始まったばかり。例えばアイデアを書くとすぐに、文献をアラートしてくれるものやスタイルを訂正してくれるものもある。

林氏:今日ご紹介した流れはあまりに急速。フロアに聞いてみたいが、この状況についていくべきか、状況を理解した上で様子眺めが良いのか。

フロア6:エッセンシャル（must have）なものを持っていない人たちが、いいもの（nice to have）に飛びついている状況ではないかと思う。研究者にとってはエッセンシャルではないことを意識して話をすすめるべき。

林氏:最後にパネルの皆さんに一言ずつ今日の議論をまとめてもらいたい。

Bosman 氏:ツールそのものではなくて、何をしたいか。それを議論することが大事。

坂東氏:研究者の実際の利用方法が聞けたのが良かった。どんなデジタルツールを使っていて、何が実際の研究の中で足りないのかをキャッチアップしたいと思う。

鳥海氏:研究がやりたくてやっているのであって、ツールを使いたくて使っているわけではない。必要に迫られて、また「便利だから」がツールを使う理由。ツールの方も研究者側にリーチしてくれるような場面があるといい。

垂井氏：研究者は能率を上げたい。便利なものに飛びつく。過去 5 年くらいはすごく便利なものは今のところ出てきていないのだろう。意外なところから何かが出てくるだろう。出てきたらそれはついていく！機関リポジトリに投稿する理由は研究者に何もない！アメリカでは全てポシャっているという印象。研究者に実際に便利なのかをしっかり聞くべき。

三根氏：この手のサービスは持続性が大事なのではないかと思った。進めつつ、新しい物を作っていくことが大切か。

執筆：駒井 章治（奈良先端科学技術大学院大学）

参加者から

（大学/図書館関係）

・教員からこのようなツールを知っているか、と問われたときにこんな感じのものだ、と話せるようになれそうです。研究者でも反応はうれしいという感想は新鮮でした。

・ResearchGate を実際に使っている先生の話をはじめとして、研究する側の立場の方々の話がきちんときけて有意義だったと感じています。

・俯瞰的な視点と研究者の現場目線の両面からの実情を知る(聞く)ことができ、この問題の考えるべきポイントが（おぼろげながら）見えてきたように思います。

（企業/その他）

・社内での議論は完全に井の中の蛙でした。圧倒的に世の中は進んでいますね。ビジネスとして取り組める原動力を活かして、よりよいサービスを検討します。

・実際に研究者としてツールを使っている先生方の生のお声が大変有益でした。

・普段交流させていただいている図書館管理者の皆様とは、（機関向け Mendeley のような）有料サービスについてしか話題が出ないので、ResearchGate や Academia.edu の登録者が Mendeley より大幅に多いのは存知ませんでした。実際のアクティブユーザーが日本にどのくらいいらっしゃるのか、興味があります。

（その他/図書館関係）

・ソーシャルメディアをどのように使っていくかは、わからなかったが、今後ソーシャルメディアと学術情報が強くつながると思うので、今から考える必要があると思った。

・研究者にとって便利なもの、図書館員は何を提供するか、色々考えさせられた。なければならないもの、あったら良いものは何か？考えてサービスを提供しなければならない。

・SNS が研究の中でどう活用されているのかが分かり、今後どう関わっていくべきかを考えるきっかけとなりました。

企画後記

☺ 学術情報プラットフォームは、研究活動と結び付いており、研究者のニーズをいかにくみ取ることができるかが重要であると再確認しました。今回のセミナーは、ソーシャルメディアサービスに限定した形となりましたが、研究活動のプロセスにおける位置づけや研究者のニーズへの対応は、大学図書館が構築するプラットフォーム（機関リポジトリなど）に対しても当てはまり、多くのヒントを得られたように思います。

三根 慎二（三重大学）

☺ 今回の企画はこれまでの SPARC Japan セミナーの中でもかなり異色のものとなりました。特に若手の研究者のお二人から忌憚の無いご意見を伺えたことは貴重でした。そして、新しいツールやサービスは面白ければ研究者に使ってもらえるが、そのツールが無いと研究が成り立たないというレベルまで持っていって初めて持続性が生まれることは既存の製品を見ても明らかです。600 を越えるとされるツール群から明日の研究者の必需品、必須のサービスをどのように生み出すか、あらゆるステークホルダーが考えるべきだと思った次第です。

林 和弘 （科学技術・学術政策研究所）

☺ 大学図書館員として、教員への支援をよりよいものとするためには、研究者の情報利用行動を理解することがとても重要だと考えています。本セミナーは、既にどれだけ多くの研究者向けツールが登場しており、そしてそれらがどのように使われ、さらに何が求められているかを知ることができる、とても有益な機会になったと感じています。また一方で、数多くの研究者向けツール全てが必ずしも必要というわけではなく、分野の特性、研究スタイルに応じて本質的に必要とされるものを見極めることの重要さにも気づかせてくれるセミナーでもあったと感じています。

横井 慶子 （東京大学附属図書館）

ISSN 1883-826X
SPARC Japan NewsLetter
NO.29 2016 年 3 月

■ 第 4 回 SPARC Japan セミナー 2015
「研究振興の文脈における大学図書館の機能」

2016 年 3 月 9 日（水） ベルサール神保町アネックス　ホール A　参加者：161 名

企画にあたって

執筆：蔵川　圭（国立情報学研究所）

この企画は、一人の大学図書館員の実務に基づいて設計されている。実務に基づいているがゆえに、個別的な経験から噴出する様々な具体的問題をどのように解決していけば良いのか、指針を与えるテーマ設定となっている。その内容は、しかしながら実用志向にありがちなノウハウの共有ではなく、具体的な行動を促す理念の共有を目指したものとなっている。個々の業務担当の知識の伝承というより、そういった知識の一般化を行って、コミュニティの原動力としたいという意思の表れである。セミナーの趣旨文は、多くの大学図書館員の参加を想定し、こう訴求する。「我々大学図書館は，オープンアクセスやオープンサイエンスを単なる外来の概念として咀嚼，整理するということではなく，本セミナーでの話題提供を通して，日本における研究振興という文脈のなかで，次代の日本の研究支援の方策を具体的に構想しながら考えてみたい。」

SPARC Japan は、2003 年以来一貫して学術知識のオープンアクセスを主張してきた。2016 年 3 月現在、オープンサイエンスという理念がこの業界のメインストリームとして湧き出でようとしている。大学図書館はこういった時代的文脈の中にあってどこへ向かっていけば良いのか、この答えを探し出す仕組みがセミナープログラムとしてビルトインされている。図 1 は、原点となる「オープンアクセス」から昨今の話題へと繋がっていき、「大学図書館の機能」を構想するシナリオを示したものである。

図 1 セミナー開催趣旨の構造

このシナリオを演じることができる役者は、理念を正確に理解しそして実践してきた第一人者である必要があろう。セミナーは見事に、その第一線の役者を講演者として揃えることとなる。セミナーのシナリオに役者を位置付けてみると図 2 に示すようだ。まさに、セミナー開催地の名称をとって「神保町の奇跡」というべき顔ぶれである。各役者（講演者）の演題を、合わせて以下に列挙する。

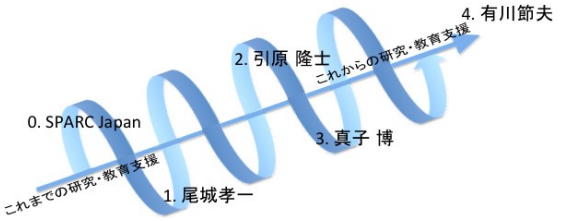

図 2 セミナー登壇者の位置付け

1. 尾城孝一（東京大学附属図書館），オープンアクセス推進と研究支援～大学図書館の新たなチャレンジ～
2. 引原隆士（京都大学図書館機構長），研究支援としてオープンアクセスポリシー策定の意味するところ
3. 真子博（内閣府），　オープンサイエンスの推進について
4. 有川節夫（前九州大学総長），我が国の研究活動の振興に資する大学図書館の機能

各登壇者の講演要旨、配布資料等を含め詳細は、SPARC Japan の WEB サイトをご覧ください。
（http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2015/20160309.html）

講演

オープンアクセス推進と研究支援～大学図書館の新たなチャレンジ～

尾城　孝一（東京大学附属図書館）

これまでの大学図書館は、読み手としての研究者の支援を中心に活動してきたが、これからは、書き手としての研究者の支援を加え、かつ、研究者のワークフローに入り込み、研究プロセス全体をサポートするよう、活動をシフトしていく必要がある。

研究支援としてオープンアクセスポリシー策定の意味するところ

引原　隆士　（京都大学）

大学図書館の資料が資源から負債へとかわりつつある状況にあることを認識している。そのうえで、オープンアクセスという理念が、研究者にとって、とくに何らかの外圧に対して、基礎研究を重視し、他者の研究プライオリティを尊重し、止揚する研究コミュニティの姿を守るために重要な方法を提供する可能性があることを認識する必要がある。オープンアクセスは、これからの研究者を育てるために重要であり、教員は自らの専門分野における論文を紹介し伝達する役割を担うことは大前提としたうえで、度量を持って後進を育てていかなければならない。このオープンアクセスという施策を進めるには、その意義を理解している人を増やすことである。いま流行りつつある、オープンデータ、オープンサイエンスの前にやるべきことがある。

オープンサイエンスの推進について

真子　博　（内閣府）

オープンサイエンスは単なる輸入概念ではない。関係者・関係機関との検討が行われて共通認識をはかっているところである。本年の G7 茨城・つくば科学技術大臣会合では、オープンサイエンスを議題の1つとして議論する予定である。ぜひ大学図書館にはオープンサイエンスの推進を進めてもらいたい。

しかし、オープンアクセスやオープンサイエンスを推進するにあたって、学内に混沌とした状況があるが、これを打破するには、まず、図書館の機能を明確にしなければならない。研究部門とのジョイントも考えなければならない。大学図書館は、唯一研究・教育に関わる情報収集発信基地である。大学の執行部に明確にその立ち位置を決めてもらわなければならない。

我が国の研究活動の振興に資する大学図書館の機能

有川　節夫　（九州大学）

大学図書館は、実はいろいろなところで進化している。法令・基準、答申・建議等をみると客観的に理解することができる。法令・基準では、1949 年に制定、2004 年に廃止となった国立学校設置法では、国立大学に付属図書館をおくということになっていた。1956 年に制定された大学設置基準においては、図書館の設備について事細かく規定されていたが、91 年に大綱化された。1952 年に制定された大学基準協会の大学図書館基準では、図書館の要件が示されており、それは今でも変わらず影響力のあるものとなっている。答申・建議では、2006 年 3 月の学術情報基盤作業部会において、学術情報基盤としてのコンピュータ・ネットワーク、大学図書館、情報発信

のあり方の 3 つについて議論された。その中には、財政基盤とかかわる電子ジャーナルとの関係やオープンアクセス運動への対応としての機関リポジトリ、図書館サービスにおける主題知識、専門知識をもった図書館職員などについて取り上げられた。2010 年の学術情報基盤作業部会では、大学図書館の機能・役割、大学図書館職員の育成と確保について議論された。学習支援と教育活動への「直接の関与」、職員の「育成」という言葉が出てきていることは着目すべきだろう。最近では、2015 年の 3 月に内閣府における検討会で、オープンアクセスやオープンデータについて、新たに図書館や図書館員への機能や役割が見えてきていると思われる。

大学図書館は、伝統的な研究支援から、より直接的な貢献が期待されている。研究図書館機能の整備・充実、機関リポジトリによる研究成果の編集発行、リエゾン/サブジェクトライブラリアンとしての役割、研究戦略関係の部・課との連携、URA との位置付けである。とくに、リエゾン/サブジェクトライブラリアンのことについて、一度、オープンアクセスやオープンサイエンスのコンテキストの中での新しい感覚の中で、現役の人は真剣に考えてみてはいかがだろうか。研究のアプローチとして歴史や比較については図書館員が行い、研究者は期待される現在の問題を解くというように先をやるようにすれば良いのではないか。

九州大学では、さらにその先のあり方として、共同研究する大学図書館像を描き、学内組織改編、整備を行ってきた。大学図書館の下に教材開発センターを置いたり、図書館同士の国際交流を実現させたりした。記録資料館や研究開発室を設置もしてきた。中でも、大学院統合新領域学府のなかにライブラリーサイエンス専攻をおき、大学図書館職員が時には学生になり時には教員になって活躍できるような体制も築いており、これは大学図書館員にとって魅力的に映っているようである。

このように、大学図書館の機能は、進化して、深化するものであり、組織もそれに合わせて変わるべきであろうと考えている。新しい図書館が現在建設中である。

パネルディスカッション

＜どうすれば大学図書館が日本の研究力向上に寄与できるかを問う＞

モデレーター： 市古 みどり （慶應義塾大学）
パネリスト： 尾城 孝一 （東京大学附属図書館） ／ 引原 隆士 （京都大学） ／ 真子 博 （内閣府） ／ 有川 節夫 （九州大学）

図書館の役割や機能

引原氏：大学図書館をみていると、個人に能力があるのは認められながら、先が何も見えていない。

尾城氏：図書館員の持っている技術や経験が外に見えていない。研究者にとっては空気のように当たり前のものとなっており、アピールする必要があろう。もっと越境していくような積極性も必要だろう。

真子氏：部長としての経験から、図書館員の個人の能力が認められる一方で、やはり越境ができない気質なのかもしれない。これは、外へ出ていけるようなシステムを作ったほうが良いと思う。また、図書館の中をどうのこうのではなく、大学なかでの図書館機能を議論すべきだ。

オープンサイエンスと図書館とのかかわり

有川氏：研究者にとって、研究データがオープンになることで、それが評価されるようになる。これはチャンスであろう。その流れの中で、図書館は、たとえばサブジェクトライブラリアンとのかかわりが見えると思う。データがオープンになるということでできる仕事があり、これは新しいサイエンスのやり方だ。

引原氏：オープンサイエンスは、進むところとそうでないところが、分野によってある。データの表現には方言があり、それがつながらないことは問題になるかもしれない。やる

べき必要のある分野からデータ接続の方向に進んでいくだろう。オープンデータを求めていない分野は依然としてある。データ共有には、データの質保証も必要になってくる。

尾城氏：URA からみた図書館員の強みを聞いた時、情報の収集と保存、組織化だと指摘された。本や論文に対してその能力を発揮できることはよく分かるが、研究データは分野によって特性が違うので、よく考えて対処しないといけない。

有川氏：従来の図書館員の能力だけでなく、変わっていく必要がある。仕事としての取り掛かりはいろいろ考えられるので、その点は気楽に考えて取り組んでいくべきだろう。

データと基盤整備活動、研究者への義務付け

引原氏：研究の方法としてベンチマークモデルを共通化して、アルゴリズムを提案するという方法が従来からある。これからは、逆に、データを共通化して、モデルを介さずにアルゴリズムを提案していくという方法が進む。データが公開されることで生まれる技術が出るようになる。

真子氏：研究データに関して、出版界との共存関係を考えてもいい。世界の潮流もある。もっと研究者を守る議論が必要。また、上から規制していくというのは現実的ではないので、現場感のなかで議論が必要。

有川氏：研究不正というからみでデータが取り上げられるところがあるが、研究者が自分を守るためにエビデンスとしてオープンにするというのは自然な発想としてあると思う。研究環境に関しては、論文の独創性とは違っていて、いい考えがあればどんどん真似すれば良い。

引原氏：理論、数値計算、実験という 3 つの科学の手法があり、どれか 2 つが整合しなければ論文にならない。データのみの場合は、科学的妥当性の保証が無い。だから、いろいろ実験をやって絨毯爆撃的に事象例を蓄える。それがデータを作って偶発的に現象発見につながり、あとから理論でおいかけることも可能だ。こう言った考え方が広く主張されるようになったということ。

フロアから

フロア1：科学の時代の流れでは発見は誰のものかという帰属で競争するのが今であるが、データを公開することに意味を見出し、かつての神の知識を見出す時代のように文殊の知恵で発見をするというプロセスを認めるべきであろう。図書館とのからみでは、研究推進という意味で、オープンサイエンスにかなった環境整備を行うことが可能であり、少なくとも次世代の研究者へ影響を与えることはできるのではないか。

真子氏：若い世代、次世代につなげるということは重要だ。研究者に対して、そういった考えで行動をしていって欲しいと思う。

引原氏：時代や世代に応じて学ぶ方法や内容は異なるものの、基本的に学ぶべきことはある。それを学ばせる環境は、いま不十分である。研究のように新しいことを組み込むときには、世間で追及される効率の要求ははずさないといけない。いろいろなステップがあることを認めることは重要だ。

フロア2：デジタル化と標準化について

引原氏：標準化については、日本の産業界は市場を抑えて標準化を狙ってきた。欧米はその前にルールを決める。だから市場を持たない日本がのこのこと後から出向いては、一切標準化に関われない。だから、標準化の会議に最初から出ていく必要があろう。そういった会議に教員を送ることを考えている。

全体を通して

「研究振興の文脈における大学図書館の機能」というテーマ設定は、とかく忘れがちなそもそもの大学図書館の本分を再確認するという重要な機能を果たした。本会合を通して、我々はいまもっとも話題となっているオープンサイエンスや研究データについて図書館がどのような役割を果たすべきか、ということについて議論する機会を得ることができたのではないだろうか。

参加者から

（大学/図書館関係）

・真子さんが以前国立大学図書館にいらした上で、今、内閣府でオープンサイエンスを扱われていることをとても心強く思いますし、また興味深かったです。G7 でトピックとなり、日本がリードする立場となること、見守りたいです。

・研究者側のお話と、政策を進める立場のお話と、異なる視点からのかなり踏み込んだお話が聞けて、それぞれのお話の共通するところ・異なるところを考えるなかでオープンサイエンスとは、とか図書館がやるべきことは何かということが見えてきた気がします。

・このテーマのイベントとしては、違う次元（マネージメントレベル）からの話がきけて有益でした。

・現代における大学図書館の機能とは何であるか、明確な方向性が見つけられずに過ごしていました。講師の方々から方向性を示して頂き、少し整理ができました。職場に戻って、大学における図書館の機能について考えていきたいです。

（学協会/学術誌編集関係）

・直接業務に関わるものではなかったが、別の立場からの考えがきけて、今後のオープンアクセス・サイエンス方針検討の参考になった。

（企業/その他）

・過激な言い回しとあった分、本音というか、熱い思いが聞けて、腑に落ちました。

企画後記

☺ 図書館員の会議やシンポジウムの場で、研究者の激しい思いに触れるチャンスはそれほど多くありません。引原先生、有川先生、ありがとうございました。マイケル・ニールセンが唱えるように、「人類が抱える重大な問題解決への貢献」がオープンサイエンスであるならば、主役はあくまでも研究者ですが、陰ながら図書館員として関わりたいと強く思いました。しかし、科学コミュニティの価値観が変わるって並大抵なことではありませんよね！

市古　みどり　（慶應義塾大学日吉メディアセンター）

☺ 多くの皆様に会場へお越しいただきましたこと、心より御礼申し上げます。本セミナーは、研究振興とオープンサイエンスをテーマとしながらも、講師の皆様より特定のトピックにとどまらない本質的なご指摘をいただき、図書館員そして社会に貢献する人間の在り方について、深く考える機会となりました。関係者の方々には、企画から開催に至るまで的確なご提案とご助言をいただき、誠にありがとうございました。

星子　奈美　（九州大学附属図書館）

☺ 今年度最後の SPARC Japan セミナーの企画を担当させて頂くとこができ大変勉強になりました。セミナー自体もとても刺激的で、これからオープンサイエンスに向き合っていく大学図書館職員にとって、意味のあるセミナーになったのではないでしょうか。今後とも、皆様との情報共有や連携によって少しでもオープンサイエンスを含む学術情報流通に貢献できればと考えます。ありがとうございました。

梶原　茂寿　（北海道大学附属図書館）

☺ 今回の企画は、おそらく、何か特殊な状況に見舞われた結果だと思う。私は、ここ NII の地で、10 年の間に見てきた学術情報基盤と大学図書館にかかわる出来事を踏まえて、四方八方からどういった風が吹くのかを理解できるようになってきた気がしている。その、いま吹いている風を、星子さんという一人の大学図書館員に焦点を当て、どちらの方向に吹いているのかを分析することを試みた。その分析は瞬く間に、方々から洗われ、本来分散していた場のエネルギーがある一点に集中していく様子を見ることとなった。それは、神保町という地の、なせる技だったのかもしれない。

蔵川　圭　（国立情報学研究所）

国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC Japan）年報
—平成 27 (2015) 年度—

平成 28 年 10 月

発行　大学共同利用機関法人　情報・システム研究機構
国立情報学研究所　学術基盤推進部　学術コンテンツ課

〒101-8430　東京都千代田区一ツ橋 2 丁目 1 番 2 号
TEL　03-4212-2351
FAX　03-4212-2375
E-mail　sparc@nii.ac.jp